明治廿年十一月二十日發兌

いらつめ

目次

第五號

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令德を進め、及び地位を高むるにあり。家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ、姫鑑には令德を進むべき佳話、實傳を載せ、雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尙の風を養ふべく、その他時時の要報及び評論を掲くるものあり。

左の諸君ハ此度更に本社の業務を協贊し論文を寄せんとを約諾せられたり。

法學士 一木喜德郎君
文學士 高田早苗君
醫學士 竹中成憲君
文學士 岡田良平君
文學士 天野爲之君
秋山四郎君
佐野安君
理學士 鮫嶋晋君
理學士 宮崎道正君

右いろは順

いらつめ第五號

いらつめ

日本婚姻法に付ての所感。

婚姻の大切なるは今更言ふ迄もなく女子畢生の目的終世安危の定まる所は主として婚姻にして女子教育の目的も亦一は貞婦良妻を養成するに在るが故に世の女子教育を以て任ずるの論士が熱心日本婚姻の弊害を痛論して措かざるは誠に尤もの次第にて余儕は唯同意同感を表するの外なき而已。日本の婚姻には實に弊害あり早婚は恐るべし壓制の婚姻は一家の不幸を來すその基なり。凡そ是等の諸点は實に公明正大の議論にして聊か疑議の容る可き無く世人の論ずる所既に盡せり。今に至て更に喋々の辯を費すは所謂老婆の繰言と一般祇に讀者の嫌厭を來すに足る而已。然れども眼を開いて熟々日本婚姻の状態を見れば余儕亦以上諸点の外に於て聊か感ずる所なきに非ず。是余儕が論題の陳腐なるをも厭はず此に日本の婚姻に付て少しく論ずる所あらんとする所

以なり。

余儕の日本婚姻法に付き第一に感ずるものは結婚の年齢なり。早婚の弊害も已に世人の認むる所なりと雖も男女年齢の差異に至ては生理學者の議論已に一定せるにも拘はらず日本の習慣及び日本の人心漸く其緊要を感ぜざるに至るの傾あるが如し。夫れ男女年齢の差異甚だしきときは体質互に相適合せず從て生兒の發育及び禀性に悪結果を及ぼすは勿論年の少長に由て性質に大異あるは故らに論ずる迄も無きことなるが故に夫妻の年齢甚だしく懸隔するときも一は他の綿密なるを厭ひ一は他の粗漏なるを怒り双方不快の感覺を生じて遂に一家の不幸を來すに至るは時に或も其恐なしとせざるなり。是畢竟年齢の差異に由て男女の感情相懸絶する所あるを以てなり。日本從來の習慣を見れば早婚の弊害こそあれ年齢の差異に至ては通常適宜の度を守りて概して非常の不規則少なかりしが如しと雖も西洋の風習は往々之に反するものあり或は二十にして四十の男子に嫁し三十にして四十の女子を娶るが如きは決して稀ならざるの例にして固より通常相當の釣合ありと雖も主として愛の點に

着目して大に年齢の差異に注目すると少なきが如し。此一点に付て之を見れば日本從來の婚姻法は西洋に優ると云ふも未だ遽かに謡言として之を擯斥そ可からざるなり。翻て日本現時の勢を見れば此日本古來の美風を捨てゝ年齢懸隔の甚だしや否は深く之を顧みざるの傾ありて數年の後に至て時に或は言ふに忍びざるの弊害を上流社會に見ると無きに非ず。是畢竟少長感情の差異を察せずして一時畢生の大事を定むるも共住の年月久しきを經れば性質の差異漸く現はれ互に不快の念を生ずるに至るを以てなり。今日の有樣より見れば下等社會に於ては概ね結婚年齢の比例を得中以上の階級に於て却て往々年齢懸隔の大なるを見るは蓋し文物一新の際現時並に未來に勢力を有するものは概ね十數年の苦業を積みたるものにして世に出づるの資格を備へ結婚そるを得可きの地位に在るものは概ね已に三旬に近く而して女子に關しては其教育未だ普ねからず二旬に達せざると遠くして早く已に結婚し得るの位地に達するが爲一時余儕が前に陳述そる所の奇態を生せしに非ざるを必せずと雖も兎に角今日の傾向は余儕の甚だ喜ばざる所なり。早婚の言は余儕實に之を恐

る。然れども唯男子の一方に於て而巳早婚を爲さゞるも女子は猶依然として舊態を變せざるときは是即ち早婚の害に重ぬるに年齢懸隔の弊を以てするものなり。以上陳述するが如きの理由なるを以て余儕は早婚の弊害を矯正すると共に併せて年齢差異の度に注意するの日本舊來の風習を保存せんと欲するものなり。

日本婚姻法に付余儕の感ずる所の第二は離婚の難易と一家の幸福との關係なり。蓋し離婚の多きと日本の如きは實に世界無比にして統計の示す所に據れば歐洲諸國にては離婚の數(離婚を禁じたる國にては別居の數)多きも百分の五六に過ぎざるに獨り日本に於ては其割合遙かに三分の一に超過せり。是實に驚く可きの狀態にして國家元氣の薄弱なると此の如きは日本の爲に慨歎せざるを得ざるなり。

今日に當て此一大弊害を匡正し國家の元氣を養成するの一方は離婚を難うするに在り。離婚の難きは離婚者の現數を減少するの効あるは勿論の事なりと雖も多數の結婚者をして余儀なく婚姻を繼續し不幸に此の世を送らしめて

而して徒らに離婚の少なきを喜ぶは素より余輩の取らざる所なり。余輩の離婚を難うせんと欲するは唯其現數を減ずるの効あるが爲に非ず之に依て一家の不折合を醫するの効驗ありと信ずればなり。

日本舊來の狀態を察するに口にこそ婚姻の大事たるを語れども實際に立入りて之を見れば實に無造作なるものにして往々僕婢を雇ひ入るゝと殆んど同一の感を爲し若し一家和熟し難き場合には輙ち離婚を爲すの覺悟にて始めより鄭重の勢を取らざるものあるに至れり。是畢竟離婚の容易にして未だ充分に婚姻の一大事たるの感覺を生ぜしむるに足らざるを以てなり。離婚にして難からんか結婚者は皆始より適宜の注意を盡し將來に至て一家の不和を生ずると少なきに至る可きは已に世人の知る所にして敢て余輩の多辯を要せざるなり。

然れども右普通の事實の外猶は離婚の難易に由て一家の幸福に影響を及ぼすの緊要なる一原因あり。夫れ他人の事は隨分善き事にても左迄に感服せず自身の事は左程にも無き事にても自負するの念を起すと、得易きものを輕んず

て得難きものを重んずるは共に人情の然らしむる所なり。離婚の容易ならざるは即ち夫なり妻なり又は親族なりをして彼は我が家の人なり我は彼の家の人なりとの感覺を強うせしめ且つ一たび之を定めたる後は復た得易からざるの念を生ずるものなるが故に假令其人は必ずしも完全ならずとするも所謂慾目なるものよりして左ほどに缺点を見出さゞるは人情の結果自然の道理なり。殊に日本現時の親族組織に於ては一家の調和せざるは主として舅姑と新婦との間に在り。諺に曰く稟賦不全の兒を愛するの念は通常の兒に勝ると。然るに新婦に對しては勢全く之に反し却て其缺点を發見するに汲々たるの狀あるは蓋し離婚の容易にして關係の確實ならざるが爲め一家同体の感覺實子に於けるが如くなる能はざればなり。若し一朝離婚を難うするの制を設くるに至らば新婦に對して慈愛の念を起さしむるに多少の効驗あるは人情の自然なり。是に由て之を觀れば離婚の難易が一家の幸福に影響すると問はずして明なり。

日本婚姻法に付き余儕の感ずる所の第三点は親族の組織と一家の幸福との關係なり其詳細に至ては請ふ他日を待て之を論せん。

ふくさづゝみ　第二回

美妙齋主人

けれど取ッて仕舞ッた上は仕方が無いと思ッて妾もやう〳〵胸を据え、路次の溝板を踏んで家へ歸らうと爲たが、何と無く良心の譴責が有るので溝板ががた〳〵する音さへも氣に掛かる程で、家の門口へ來ても「この包を御父さんの御目に掛けやうか知らん、それとも掛けまいか知らん」と只當惑するばかり、我家の敷居さへ高く爲ッた樣な心持に爲ッた。　それだから顔を見ても自然活潑な挨拶も出來ない。「是ではならぬ。悟られると大變」と自分で自分の氣を取直して故意と笑顔を爲たり、又は双親の談話の句切目には骨を折ッて乾度挨拶えたけれど實は妾には何の談だかよくは分らず、挨拶の語とてまた其通り、語の形こそ違へ、意味は何れも仝じ樣な「へエ」「左樣」「オヤ〳〵」「マア、どうも」ぐらゐであッた。良心の牙はます〳〵強く心を嚙んで來る。　つまらない談話も氣の故か妾の身上に似て居るやうに思はれる。　妾も終には耐難ねて裏口の方へ行き、其處で包

を解いて見ると、果たして中には一圓札が四枚、チャンと折紙の中へ入ッて居て、帛紗の角にはたゞ「杉野」といふ名が着いて居たばかり、住處などは更に無かッた。

「入用が有ればこそ那の方も是金を持ッて居たのだらうに、それを斯う妾が拾ッて匿して仕舞ッたから嘸心配して居るだらう。途へ遺失した那の方の不注意だけれど、それを拾ッて屆けずに居る者は元より罪人に違ひ無い。是で幾許でも旨いものや藥になるものを買ッて御父ざんに上げればもはや妾の身体は暗い處へ行かなくてはなるまい。左樣なッたら亦も御父ざん達の御心配が出來て來るのは當前……左樣かとて折角是だけ拾ッたのを此儘捨てゝ仕舞ふのも……さて、何う爲やう。また是を御父ざんの御目に掛けたなら、屹度その出處を御聞きなさるだらう。其處で妾が拾ッたのだと云へば直に其筋か先方へ屆けると仰ッて中々自儘に御遣ひなさりも爲まい。眞逆に、借りて來たとも云へず、また盜んで來たとも云へず、ト云ッて貰ッて來たとも云へず……噫いゝ分別は出ないかなあ。」

胸の中に湧起つ雲は啻是ばかりでは無くて實に數限無かつた。其内に母親

も妾を呼ぶので慌てゝ妾も其包を懐中へ捻込み、素知らぬ顔をして母親もろとも種々な事を爲て居たが、どうしても胸が落着かない。「いッそ思切ッて出して見ようか」と九分までも思ッても後の一分の決斷が鈍く、左樣かとてつら〳〵考へればそれを持主の處へ却しに行くにも何と無く極りが歹く、兎角の内に遂に其日も暮れて仕舞ッた。寢ても些とも寢就かれず、思回せば回すほど末の事が案じられて、忍び〳〵に溜息を吐いて居れば母親が聞咎めて「阿園、御前血道でも起ッたかね」と尋ねる。「いゝえ、どうも爲ませんが……なんだか今夜は寢苦しくッて……」と出鱈目に返答する内にも包の事が胸に騒いで「母親さん、包……否、あの遺失物を拾ッて届けず、後にそれが露顯して、あの懲役に行ッた車夫さんが向裏にありましたね」など言はずとも宜い事を包兼ねて言出して、それでいよ〳〵心を悩まして居た。

翌朝起きて考へれば考へるほど持主へも氣の毒で、親たちへも影護く、終にその女生徒の學校へ届けやうと決心して、些ばかりの隙を狙ッて一息に學校の門まで行きも行ッたが、さて其處で中を見ると色々美しい衣服を着た女生徒が幾





許も居るので、婦人の心弱く、我身の繿縷を見返ッて益々耻かしく思はれ、心が後れて容易に中へも入られなかッた。漸く思返して終に門のうちへ一生懸命すた〳〵と駈込んだが、猶其處に居る女生徒の方へも些しも顔を向けず、何も無い塀の方を何か珍らしいものでも有るやうに故意と瞻詰めながら事務所へ行き、其處に居合せた女教師の前へ跪いて。

「あの鳥渡伺ひますが、此學校の方の中で那邊の往來へ遺失物を為すッた方はムいませんでしたか。」

今更考れば實に淺薄な尋方で、些し分別の有る者が為る樣な問ではなかッたけれど、その時妾の心も只混雜して居たばかりか、猶妾とて世の經驗も薄いこと故、こんな尋方でも十分宜いことだと思ッて居た。處が、その女教師は這方を見て、何やら不審らしく思ッた体で、

「は、遺失物……何の遺失物。何うして御前さんもその遺失物の持主が此學校の者だと御知りなすッたの。」

是で妾もぐッと詰ッて愚圖々々返答して居る内に此室へずッと入ッて來た

のも、思掛ない、その包の所有主で、其人も自分の物だけ直にそれに目を注けてその出處を教師に聞くと、教師は有の儘に仕細を話してやがて妾を其人に紹介した。 妾の胸の樂屋では烈しく大鼓が鳴る。妾の耳から頬へ掛けては紅の幕が一面に亘る。 先方ではそれに氣が注かない。教師もやがて包を検めて十分に其人の所有物だと鑑定を付けたと見えて直にそれをその人に渡すと、その人も今は嬉しさに妾に向ッて丁寧に禮をした。

「洵に飛んだ御親切な方の御眼に注まりましたので、この包も恙無く妾の方へ戻りまして……有難う存じます。 いづれ妾も御禮に上りませんでは……御宅は何方で厶います」

たとひ恩を受けたにもせよ見る影も無い者には大概の人が酷く丁寧な言葉を用ゐないものだのに、此人ばかりは左樣でなくて妾のやうな貧乏人にも大層慇懃に挨拶した。 其處で、妾はいよいよ氣の毒でならない、「妾も本當に安心いたしました。 左樣なら、御機嫌よろしう」と云捨てた儘、一禮して直に學校の外へ逃出すと、先方の方は追蒐けて來て「是非とも」と迫るので據無く妾も住居を知せて

其場は先それで別れた。それから妾は家へ歸ッて兩親に其事を宜加減に話すと兩親も「それは善い事を爲た」と云ッて大層に喜んで居るので妾の胸の荷重もやうやく無くなッた。その時の心れたのしさ、それも口で云盡くせる程の事では無い。その些し前とは打ッて變はッて、つまらぬ事にも我知らず笑が躍出し、僅少の事でも張合よく身体が動いて……本當に、是だから、惡事を爲るものでは無いと妾もつくづく觀念した。まだ是でも良心の譴責が有るうちに如此改悟して仕舞ッたらば妾もまづは潔白の身となッたが、是がもしも左樣でなかッたなら長く不愉快を嘗めて居たに違無い。

まあがれっと　　第一回の下　　樵耕蛙船

「這は殊勝なる言葉かな。夫に代りて（まあがれっと）がその言葉には禮をも云はむ。如何に、然らば、此後に、もし料らざる事ありて此國危くならんには汝達は什麼如何に爲す。」

「仰までには侍らずかし。鬢はせ、この頭には弓弦となすべき髮もあり、此腹に

は壯士の渇を救はん血潮もあり、死なば骨もて砦を補ひ、肉もて糧とせんばかり怯るゝ事や侍るべき。」

「勇ましや、忝し。聞かせたまはゞ如何ばかりその赤心を愛給はむ。それに付けても此後は必ともに脫落無く不慮の事に備ふべき覺悟爲さずば……喃聞きね、女子ながらも吾儕とて（もんとふおると）の妻になむ、女子ながらも汝達とて（もんとふおると）の侍女なる、世に耻かしき所爲あらばたゞ身一人の上ならじ。是等に心せよかしな……てと言ふまでにはあらねども。」

「仰承り候ひぬ。など解りて侍るべき。御心安く在してよ。」

剛しといへど婦人なり。迭代に主從が諫奨ます其間だに眼は渾べて一株の薔薇の方にと集まりつ、烈しき語氣の隙間より折々嗟嘆の聲漏れたる、氣色あまりて最いぢらし。霎時は立ちも去りあへず心とも無く佇立し折しも其處に馳來しは一人の走奴にて、其處に夫人の在しゝ体を見るよりやがて跪き、

「大事に候ふ。はやとく〳〵御内に入らせ賜へかし。御注進の武士が稍馳着きて候ふ。」と

言ふよ欣ぶ「まあがれッと」然らバとばかり慌たゞしく元來し方よ引返して、書院よ入れば、這は如何、其處よ扣へし武士はすべて負傷よあらぬは無く、遠路を走來りたる苦痛の有樣あらはれたり。「スハヤ軍は勝たざりしよ。さるにてもまた我夫の安否は如何」と急立てば那方はやうやく面を擡げ、

「軍は勝たず候ひき。其後度々の合戰よは味方多く捷利にて時には那奴(ふひゑッぷ)の首を得んとせしとさへ無きよしもあらざりしよ思掛あき先度の一戰…料らず敵よ伏勢あり、蹤く處よ跟込む(ふひゑッぷ)鞭打振りて大音揚げ、(時刻は今ぞ、やよ兵ども、敵の旗色變はりしぞ。退きあ、進みね、揉潰せ」と下せし下知よ勇める敵兵、鯨波を作りて亂寄る、味方に隙は無きものから潰初めては堤の洪水、堰留む手段も無きほどに、薄情や、君には、我君には……」

「さて我君には如何に爲し、如何に成行たまひしぞ。胸騷あり。打出でよ。苦痛もあらめどいざ疾く〳〵」

「扨も君には、我君よは……(苦しや疵の……こは坐)……獅子奮迅の勇を振ひ……」

「現によ。夫より如何に爲し。」

「憤怒の面色朱を注ぎ、潰るゝ兵ども睨付け「こは腑甲斐無し、何事ぞ。盛返さずや、戰はずや。笑を受くるを知らざるや。耻を貽すを知らざるや。おのれふひきつぷ……やよ兵ども。返せ、返せ」と鞍坪を敲きたまひて勵ましつ、左右に馬を跳らせて切りに敵を蹄にかけ〳〵、少時防がせ賜ひし程に、無殘や馬は太腹を突かれてたまらず倒れしにぞ……」

「主も殺されたまひしか。」

「否捕はれて……」

「こは如何。主は敵に捕はれて……こや、生捕にせられしか。這はまた思掛も無や。薔薇……薔薇……薔薇は榮ゆるに……今も今とて彼の薔薇を……」

跡は言葉も更に無し。負傷は疵の惱にや今更勇氣とても無し。侍女どもも得堪へでや面を擡ぐるものも無し。

原かね子の傳。

書に見、物がたりに聞く、往方の賢婦烈女は多なれど、かくも近き世にいと優れ

たる人のありしはなか〲めでたきことにして、書綴るだに記者もまた硯を更め紙を正して、さて机にこそ向はめ。その人はそも誰ぞと言ふに、今茲明治二十年九月　日に物故たる、函館の女教師原かね子になん。かね子は岩代國、會津郡若松の人にして、天保二辛卯年の春三月若松鶴が城の郭内、甲賀町通に生れたり。父は小池源太右衛門とて世々會津藩に仕へ、五百石を領しつゝ、母は名を阿清とて、會津藩の國老なる諏訪大四郎の姉なりけり。二葉の栴檀、頻迦の雛、古き比喩を引くにも迨はず、かね子は幼き頃よりして孝心人に秀れつゝ、僅に十二歳ばかりの頃なりき、父の源太右衛門は殿に尾きて江戸に勤番しつゝありしに、料らずも中風症に罹りてはなはだ危くなりたる由、若松にも聞えしかばかね子の措愕大方ならず、翼あらば翔りもして父の側に冊きつ看護だに爲まくは思へども、道の便宜だにも無く、殊に女兒の事にしあれば望を遂げん由も無し。思入ればいとゞしく胸騒がれて得も堪へず、今は神に願ふより外には詮術とても無しと、健氣に心を定めつゝ、草木も眠る丑滿の刻限違へず水を浴び、一心不亂に祈ること凡三十日ばかり、あゝそれ妾の心根を憫賜ひて父上の御病着を救ひてたべ。若し

此望協ひなば誓ひて妾は此後とも、日頃嗜める獸肉をかならず食侍らじ」と祈念せしにぞ孝子の一念、程無く父の病着も全く平愈するを得て恙なく歸國せしになむ、かね子の喜悦比へんものなく、天に拜し、地にひざまづき、夫より身をば終るまで只一片の獸肉だに口に入れたる事無かりけり。

かくて兼子は十七の時、仝藩士なる原源八の嫡男求馬の妻となりし程に其時舅源八は猪苗代龜ヶ城の城代なりければ兼子が婚姻の儀式より祝賀の饗宴に至るまで善を盡くし、美を極め、盛といふも愚なり。 其後夫の家にありては常に數十の婢僕にかしづかれ、何不足なく暮らせし程に、榮枯は浮世の習とて其處に一の殃禍起れり。 そを如何ぞと尋ぬるに、後七年の月日を過ぎて舅源八隱居せしより、求馬やがて後を繼ぎ、物頭より御奏者番と見る間に立身せしを見て、求馬の文武に達せしことを毫知らぬ白痴ども目を側てゝ羨むほどに此頃の常習とて新に御奏者番になる者の如きもまた賄賂を先輩に贈りてさてその古例格式などを傳ふる事と定まりたれど、潔白なる求馬にはかゝる陋き所爲を爲して人に阿ることを欲せず、其儘に打過ぎしより人の嫉惡は益烈しく、事に觸れ物に應

じて種々の妨害を爲すのみならず、ある時藩主が三の丸にて兵馬の調練を上覽ありし頃なれども求馬には其時刻を詐傳へて遂に之を遲刻せしめ、面目を失はしめしなぞ、今は求馬も憤怒に堪へず遂に其先輩なる河手何某を刺殺し、其身は其儘自殺して、はかなくも家は斷絶せり。此時かね子は二十九歲榮華に飽きし昨日に變へて今は喪枯の身と成果てつ、その悲しさ口惜しさは更にやる方とても無けれど、流石に希世の女丈夫とてみづから心を取直して舅姑に仕へ、子を孚み、更に他念も無きになん、譽めぬ者は無きほどにて、德は孤ならず藩主にも舅源八が在職中の功勞を思出で、かね子の腹に生れたる甲斐八郎(其時五才)を召出して祿二百石を賜はりて士籍に列ぬることゝ爲つ、かくて世の中は次第に騷がしく、八郎十四となりし頃は明治戊辰の年にして會津近傍は倏忽に修羅の街となりしかば、八郎もまた練兵に長けたる由にて拔擢られ、農兵組の長となりて切りに士卒を訓練せり。

肉類煮樣の事幷炙樣の事。

臺所にて老婢が新參の下婢に話す聲「肉を煮ますにはネ肉の塊を鍋に入れ冷水を注ぎ込み、それから竈にかけ、一概に火を烈くそると生煮となりますから、初めは沸々煮きつけ、善く熟るまでオ煮なさい。又お燒ものをこしらへる時はよく火を撥しおき、最初は遠火にかけ中まで火の透ッたころ次第に火に近ける樣になさいナチ」とは昔より仕來の煮樣炙樣の傳授でありますが、斯樣にいたしましては折角の肉も養になり兼ねますから、肉類の料理方に一の改革を致したいと存じまそ先最初に新料理方を述べましてそれから何故昔の仕來が惡いといふとと新法を用ゐねバあらぬ理窟も述べましやう。

肉類の煮樣は先湯を沸し置きそれから塊を入れ猛火にかけて十分間計煮て少々火を去り熟そるまでは成るべく緩に煮るべし。又炙樣は烈火を用意し置き塊を成るたけ之に近よせ(燃え付かぬやうに)十分間にして火より遠ざけ緩に之を炙るべし。

さて斯樣に改めたいと申す因緣は少々に長くなりますが、是は臺所を支配に

さる方々には是非にお心得置きを願ひたい事柄ですから一應お聞取を願ひ升。日々の飲食物の中にて人の肉となりますものと体温を生ずるものとの二種になりますが、肉となります飲食物の中で至極便利で其上養分の多きものは蛋白質と申すもので、卵子の蛋白は蛋白質ばかり、又魚鳥獣類の肉或は血の中に此質を多く含んで居りますこれは熱すると凝固るもので、皆様御存の通り卵を沸湯の中に入れますれば暫時の間に固まりますが、尚火に懸けて置きますと遂には不消化物となります。お醫者様が卵は半熟に限ると申すもこの道理で全体卵は消化し易き故に貴いものでありますが不消化物となつた卵は食べぬが勝て居ります。程よき半熟を得んとするには湯を沸らし置き卵を投ると直に火を去り四五分間に取り出すべし卵を投て後湯を沸らさは過熟て不消化物となります。

それでは前に述へた新法では何故に煮るときは最初に肉を沸湯に投れ炙るときも烈火に近つけるかとの疑が起りましやうがこれは經驗のある臺所の老婢でもわかりますまい。　肉を最初文火で煮ますれバ養分は皆出で仕舞ひ文火

で炙りますれバ養分ハ汁となりて滴りますから殆ダシガラを食る樣な譯でござります。新法も食卓の上にダシガラを並べるのか馬鹿らしいからのとであります。新法にて最初に沸湯に投れ烈火に懸けますのハ肉の外面にある蛋白質が忽ち凝固りまして、謂ハゞ蛋白質の皮が出來まして中の養分ハ少しも洩れません。それから内部の蛋白質の凝固らぬ爲成るべく文火にかけるとであります。是ハ學問の應用で老婢よりハモソツト手際よくお料理の出來る仕方でござります。

西洋料理方

焙り肉ハ火にて肉を焙る料理方にして、手間入らずの簡便料理なり。此料理方にハ別に道具を要せず、唯鐵鈀若くハ厚き鐵鍋あらバ事足らん。凡そ肉を焙るにハ烟を揚げざる強き火を可とす、肉を焙る前にハ先ず鐵鈀を火にて熱し、食用油の染たる紙を以て鐵鈀を拭ふて肉のこれに燒け附くを防ぐべし。肉を焙るにハ其表面の焦るを防ぐが爲屢々肉を轉覆することを怠るべからず。焙り

肉ハ手間入らずの簡便料理なれども、一旦焙りたる肉ハ其温かなる間に食せざれバ風味を損ずるを以て、豫て料理を調へて客を待つときハ却て此料理方ハ適當ならず、家政を司る方方ハ御注意あらまほしきことなり。 焙り肉又ハ炒き肉ハ豫め打て肉を柔軟になすことあり、然るに肉を打つハ之を柔軟ならしむるの外にハ効なきを以て、日を經て自から柔軟なる肉ハ打つを要せず、打たバ却て美味ある汁を失ひて肉の風味を損ずべし。

ビーフステーキを焙る方。

ビーフステーキを焙りたるものハ焙り肉中尤も美味にして世人の好んで食するものなり。 ビーフステーキに用ふる肉ハ總て屠りて後日を經たるものを可とす、殊に臀肉の肉を最上とす、これ風味よくして柔軟なるが故なり。 其肉ハ五分より八分の厚さよ切り、其大さハ轉覆するよ便なるを適度とす。 又胡椒の香味を普ねく肉内よ及ぼさしめんが爲肉を焙る前よ胡椒の粉を撒布けることあり。 肉を鐵鈀に上せたらバ忙しく轉覆すべし、其焙る時間ハ火の強さと肉の厚さとよよりて一樣ならざれバ、これハ料理人の注意よ任すべし、且つ強く焙りた

るを好む人と半熟を好む人との差別あれば、それは之を食する人の好悪に従ふて心すべし。既に焙り終りたる肉は熱き皿に盛りて最上のバターを塗り又少量の塩を撒布くべし。

ビーフステーキは料理したる後速かに食すべし、若し手間どりて食すること後るれば風味を失ふべし。

マットンチヨツプを焙る方。

マットンチヨツプは羊の後股の肉を中央より切りて製す、肉の厚さ幷に之を焙る方はビーフステーキを焙るに同じ。但し羊の股肉は脂肪多きが故バターを用ふるを要せず。

講義

經濟學とは何ぞや(承前)

文學士　天野爲之講述。

甲。これは誠に面白き開化の起りより進む様など承りぬ。とてものことに今すこしこの話しを盡されたし。

乙。その問題は追々に御承知になるべし、其は何故なれば經濟學の全き仕事は國民を富まし、之を進めし處の原因を尋ぬるにあればなり。故に經濟學とはなく主として歴史より成る者なり、尤歴史とても君王や戰爭などの歴史にてはなく技術、交易、發明及び文明の歴史などを云ふなり。「アメリカ」州のごとく國を建てよりまだ年もへぬ中に速に富を増し繁昌するものあれば、また埃及「シリヤ」のごとく人口大に減じ、國家の亡滅に歸するものもあり、もしこれに付きて何故に一は衰へ一は昌えるかの道理を合點せば一國が其國民の幸福を得んが爲に計畫したる方案、假へば何等の交易は之を奬むべきか、何程の商品は之を禁ずること可なりや、農業に奬勵を與ふべきか、物品の價には制限をおくべきか、おくべからざるか等に付きて是非の判斷を下すことを得るに至りぬべし。

左れば經濟學とは理論と實地則ち學と術との二つより成れることを知らるるならん。いま云ひしごとき事實の知識を含むものは學にして、國の富を増し或は之を妨ぐる原因などを避くることを勸むるは術なり。もし道理に於て誤あれば實地に於てもまた誤を免ることを能はず。政府が經濟學の理を誤りたるが

爲に、富を增すことを得るの折にさへ富の自然の增殖を妨ぐることのありしことハ此后追々に申すべし。

甲。しかし古しより今に至るまで抑大なる進歩を爲せしを以て見れバ政府がかゝる誤解をなしたれバとてさしたる弊害なかりしにあらずや。

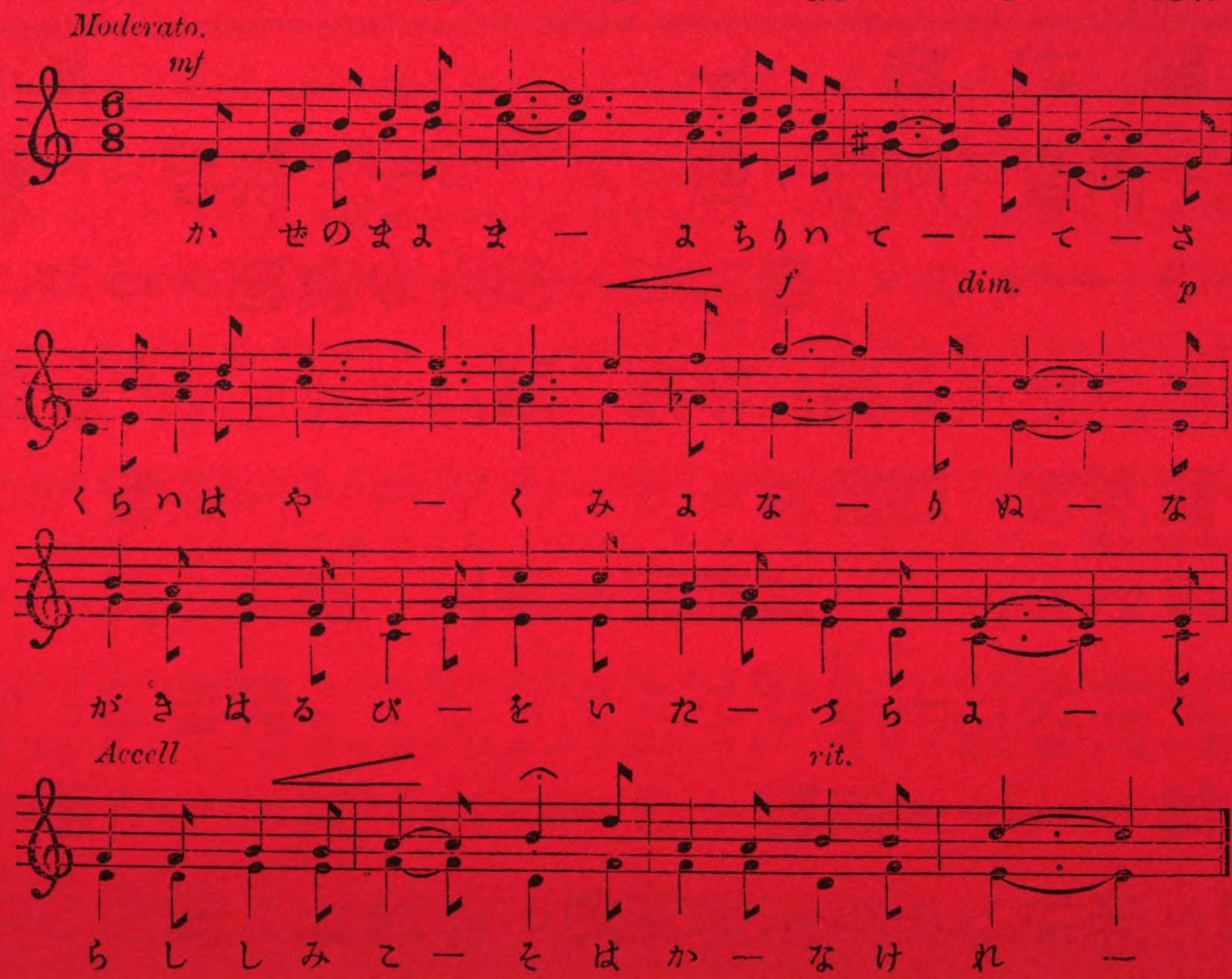
乙。國民を富まし繁榮ならしむる所の自然の原因は其力甚だ強きことなれバ政治の施し方に少々の過失ありたりとて全く之を抑ゆる程のことなし。然れども其過失の害を爲すことハ明なることにして工業を妨げ進歩を害することと言ふを待たず。悪しき政府ハ一部分の人民には幸を與ふるも一般の人民にハ不幸を與ふることあり、富の分配等しからず、貧富の懸隔を生ずるに至るハ免かるべからざる所なり。貴下には兎角ふこの研究にハ進み賜ハぬ様に見受くるハはやこれに倦み賜ひしか。

甲。否々決して左様にあらず、唯今お話のことハ能々合點しぬ。しかしこゝにこの研究を進むるには正さずして叶ひがたきことこそあれ、其質疑を容し給ハれ。貴下にハ先程より富のお話しあり、富を生ずる原因とか、之を增殖する方

法とかなど繰返し〳〵陳べらるゝを以てみれバ他人よりハ富有家になることは經濟學の大なる目的なるがごとし。然るに宗旨道德の敎によれバ餘りに富を貪るべからず富を得んと甚しく急せることは諸種の罪を犯す始めなりと云へり。しかのみならず最も富裕なる人民ハ必ずしも最も幸福なる人民にあらざるとは明なることとなり。してまさかに一人に幸福を與ふることの出來ざる富が能く一國民の幸福を増す筈ハあるまじ。よしや貧しく生活すとも善き行あるものは富みたる人よりして惡き行あるものに比べては遙に幸多きにあらずや。歴史を見ても其証據ハ少からず。「グリース」の共和時代に於て飾を嫌ひ富を卑しめしことの賞むべきハ曾て聞く所なり。「ローム」人を見ても其始は貧なるも其行ひ善良なりしと雖も后富を得るに從て善良なる性質ハ其跡をかくし遂にハ憐むべき奴隷とまでなりしにあらずや。然るに經濟學は富を愛することを敎ゆるものにして、政府の目的ハ唯にこの富を得るよ在りとするがごとし、果してさることにや。

左の唱歌は有名なる税所敦子さんの作歌にが節つけを試みたるもので御座ります　敦子さんの御歌はいつにかはらぬ金玉の名什なれども私の作曲は瓦礫も同様實につまらないもので御座りますからドウカ其御積で御笑謡を願上ますシテその譜は複音に認めてありますけれども御都合次第で單音即「メロデー」のみ離して御謠ひ下されても頓ト差支は御座りませぬ

上眞行識


Moderato.
mf
かぜのまよま—よちりれて——て—さ
f
dim.
p
くられはや—くみよな—りぬ—な
がきはるび—をいた—づらよ—く
Accell
rit.
らししみて—そはか—なけれ—

音樂を學ぶに付きての注意。其二。

毎日の定め丈奏樂し終りて疲勞を覺えなバ、必無理に餘分を爲すへからず。

活潑とせず愉快もなくて技を爲すより休息する方はるか優れり。

年長の淑女達はつまらぬ物は學ばざるがよし。時はいと貴重なり。世人の佳作となす者丈を學ぶにも百度此世に生れずバ爲し能はさるべし。

糖菓や菓子などにて養育られたる小供は健康に成人するの望なし。心を養ふも同しことにて、共に淡泊にして滋養分に富む物にて養ふべし。然るに兎角世の中には甘言を以て弟子を瞞着そ音樂教師多し。恐るべし恐るべし。

されと音樂な妙なる人の賞賛こそ多人數の嘆美よりなは大切なれ。

名人の樂譜を勉勵すへし自から妙なる音樂家となり得べし。

逐次に大家の名作を知るやう稽古すべし。

人わが未だ習ひしとなきものを奏してよなど乞はゞ、先つ全篇を熟讀して後奏すべし。

わが友達の内にて自己より技の勝れたる者を撰み出すと肝要の心掛なり。

敎會の傍を過ぐるときヲルガンの音を聞きなば内にいりて聽くべし。又音樂會などの催しあらば、勉めて參會するこそよけれ。一時流行する者は忽ち廢たる者なれば、若し流行につれて音樂を學びなば、遠からず後れ者となるべし。

白粉傳法の沿革、其害、其性質の奇なる事（四號の續）

鉛白の恐るべきことは啻に皮膚を損ずるのみならず、猶忌むべく、嫌ふべき種種の疾病を起さしむるに至りしかども、其徵候の現るゝは漸次にして那の砒石の毒、綠青の害の如く著しく俄に起らざりしがため、之を悟るものは實に罕にして、白粉を用ゐる者愈盛なるに從ひて愈之に効能を附會し、白粉は逆上を引下げ、面胞雀斑其他一切の吹出物などを退くるに大効ありなど、其逆上を引下ぐるは到底身を寒すものなるを思はず。美を思ふの心は益熾なるにぞ、遂にはまた之を色々に工夫して人造の美貌を摸するにも至り、低き鼻のものは之を高く見せんがため鼻筋に濃く之を塗り、眼の小さきものは眉の下に手際よく之を施し、笑靨

無きものハ之を頰に二重に塗りて巧に千金の媚を作るなど化粧の方法愈出でて愈巧なりき。這等の法たる、自然に光線反映の理よ原き、視線の集合そる處と集合せざる處とに强弱の勾配を行ひたるものにして、理窟より言へバ流石に美術國の人民たるに恥かしからざりしなども褒むべけれども、ひるがへりて又之を思へバ之を作るは專ら白粉にのみ依賴し、まゝ僅に紅を用ゐて唇を彩り、眼尻を際立たしめ、及び黛にて眉を補ひたる外ハ、白粉の奴隷とならざるは無し。實に此頃江戸の人民ガ白粉を費しゝ高ハ如何バかりありけむ、統計といふものの無けれバ詳に知れず、また白粉のために害を被ふりし人ハそも幾許ありけむ、精密なる醫術の行ハれざりし世なれバ今ハたゞ之を探るに由なしといへども、其消費の高と人身の健康とを害せし點に於ては實に驚くべきものなりしならん。現に、驕奢に有名なる佛國などにてハ一年の白粉製造高一億二千万斤よして、是より七千二百人の病者起り、三百人の死者を生ぜしこともありしにあらずや。（未完）

じよあんだあく（貧居の場 承前）。

然無きだに猶男子より
夫が啣出でしなぞ
縫へる衣をバ掻遣りて
見よ、今に和女が今ぞ衣る
買求めたる物よして、
夏の初といふ頃は
和女が獨草をしも
一人二人が來莵りて
さて最長く保つものよ。
價値ならずは斯迄に
聞りまはしや』と指さして
思ひにけらし、俯向きて
顔赤らめて居たりしを
胸も張裂く迄なりき。

子な甘かるは母親の
その聞く母は言葉より
「大人の御言葉現にも現
其ふるぎぬは猶いまだ
夫より茲よ幾とせか、
每も必衣するより
刈りつゝ在りし折も折
和女の機を打瞻遣り、
手繰の糸か知らねども、
地合の強き物は、喃、
嘲笑ひつありしにぞ
手持無沙汰に鎌の刄を
物の蔭にてかいまみし
されど處女が歸りても

常てふものを今斯くも
前に眼眸をうるませつ、
御理にはべるなり。
和女が二歳三歳のころ
天地かへしつ、裏返しつ、
昨日も脊門の畑にて
近きわたりの女兒の
『あれ蹈はせ、あの衣を、
兎にも角にもいと貴き
偖、何と呼ぶ布ならむ。
有繋和女も耻かしく
見る眞似をして紛らしつ、
妾はいたう口惜しくて
毫だよそれを言出です、

ひとり胸にぞ秘めたりし
露は物かは、双袖を
濕勝なるかこちゴト、
雲井の曲に比へてし
濱の眞砂の數しげみ、
ぢよあんは顔を起しつゝ

その怜悧を見るにつけ、
人に知られで絞りきと
他にはもれぬ忍音に
例もカツ手、蒼海波
繁き思にわきかへる

猶傷はしさ正木葉の
語るも言ふも皆準べて
拂かねたる浮雲の
波に打たれて粉となる
涙見せじと袖と拭ふ

(未完)

學藝

皮膚の話

衛生上清潔の必要なるとれ誰も疑はぬとなるが、すべて身の外圍のもの即ち皮膚といひ衣服といひ住居といひ、最初ハ何れも清潔にして健康に適するものが、いつしか不潔となりて健康の害となる。其原因はといはゞ即ち埃といひ垢といふ毒物に結付かるゝが故なり。さて埃といひ垢といふハ如何なるものぞといふに、腐敗れたる物質の微少なる分子にて、よく空氣中に浮遊して何處で

も行當り次第に結付く癖あり。それゆゑ埃の立つところも街道でももとより害あり。家の中ならば一層あしく、貴重なる身体に至りては最大害あり。今埃垢の身体に大害ある理由のあらましを述べむ。

人の身体は一分の隙もなく皮膚に包まれ居るとあれば、骨肉をシックリ皮膚より蟬脱し得るものあらむに、縫合なき嚢を得べし。此嚢には一面に氣孔ありて蒸發氣は常にこの氣孔より、体中の熱を伴ひて逃れ居ると皆人の知る所なり。此氣孔は場處によりて疎密あり。密なる處は一寸平方に四千五六百もありて、全身に三百万の氣孔あり。此氣孔は微細なる管の出口なり。此管の長さは彼是四分計ありて、一方の端は汗腺といふ粟粒の如き汗の溜に通す。此溜は蒸發の源なり。いつでも蒸發するときは、体内の不淨物即炭酸瓦斯(口より出る呼息の多くは此瓦斯なり)と体中の腐敗物の分子を伴ひ去る。かやうなる仕方によりて、皮膚より排出する不淨物の量は毎日殆二匁宛あり。

皮膚には、氣孔の外に膏を分泌する袋あり。此袋には常に膏を分泌して皮膚を潤し又之を軟にする機能あり。皮膚に膏を分泌しざるときには、此上に積も

り來る埃は直に確と結付き、祢ばりある垢の外套の出來るとは、讀者の直に合點せらるゝとなるべし。さて此埃は間隙なく積もりかゝり膏も亦少息なく分泌そとなれバ之を拭ひ去るにあらざれば、少間にして垢の厚き層をなすべし。垢の結付きたるときは身体を汚し容貌を損するのみならず、モツット大害あるとには、氣孔に目塗をして蒸發の作用を止むるとなり。蒸發氣は汗腺より徐々と繰出し管を通りて出口まで來て見れば、往來止となり居るなり。全体皮膚の蒸發は至極靜穏なるものなれバ、門を破りて突出る程の意氣込はなきなり。かくなれハ体内に窒伏して出ると能ハざるが故に、体熱も散ずるによしなくして、体内に鬱結し、血液の毒物なる不淨物も、其儘体内に宿りて、遂に感冒熱病の原因とはなるなり。

之に反して、氣孔充分ひらきたるときハ、汗腺よりハ蒸發氣となりて出るか、或ハ汗の珠となりて出るなり。此時にハ不淨物をハ皮膚の外部まで運び出して茲に積み置くなり。故に此不淨物ハ他の方法を用て除去るを要するなり。外より來たりて積もりし埃も内より出でゝ溜りし垢も力めて除去らざるべから

す。除去らぬ間ハ何處にありても害をなすものなれはなり。垢は自然に剝げ去るものにもあらず。又自ら拭ひ去るものにもあらざれバ、洗ひ落すより外に方法なし。人若し毎日皮膚を清淨になすことの健康に必要あるハ、毎日の食事にも劣らぬことの理由を知り得バ、毎日の務として皮膚を清潔にするが爲め僅少の勞を厭はざるべし。

倘清潔法に就きて話したきことハ數多あれども、それハ次回に讓り皮膚の組織機能と肺臟の組織機能の比較とを併せてお話し致すべし。

叢話

東京の某街に一人の男子あり。年紀二十一二、近き中、父の遺產を相續し、いまだ獨身にはあれど、多くの家屋田畑をも所有し、一個の儼然なる紳士なり。此人性來餘程內氣の質にて、些細なることにも耻ぢらふくせあり。他人の家を訪ふにも門口までゆきて、思ひ切つて這入り得ず、門口を二三度も行きつ戻りつしながら明日こそ是非這入らめとて空しく歸ること屢なり。或時近傍に住まはるゝ某

男爵より晩餐に招かれしが、男爵は眞率平易なる人と豫て聞きしかば、紳士は快よく其招きに應じ、時刻をはかりて出掛けしが、男爵の家近くまで來ると、食事の呼鐘と思はれてカンカンと一聲二聲聞えければ、紳士はドキッとし「しまつた時間が後れたか」と烈しく胸を傷めながら面を眞赤にして男爵の家に這入りしが、クワット逆上げ眼も眩み四邊に誰れが居りしやも全く無中にて、讀書室まで案内されたり。茲でホット一息つきながら勇氣を取直し、やがて入り來りし此家の令孃に丁寧なる挨拶をなさんとて一却歩する際に、直わが後に在りし男爵の靴をしたゝか踏み据えたり。此時紳士は氣の毒さうな面持にてもぢ〳〵してありしが、男爵は流石交際に巧なる人と見えて、痛をかくして露ほども色に出さす程よくあしらひ、令孃達もうちとけて物いひかけたれば、紳士も今はあまりはづかしくも思はず、ヤットのことで貴女達とはなしをなし得る程にもなりぬ。此書室の書架には、まばゆきばかり立派に裝潢さる書籍を幾冊となく並べあれば、此家の主人は定めて學者にやあらんと推し、紳士は古代の文學につきて己れの持説を吐露せしが、主人の説は一々之と符合して一點の違ひなきぞ不思議なる。

此話の中に、不圖書架に並べある十六册續きのゼノフォン氏全書に目の着き、あれ近頃珍しきものと思ひ、(かやうなる書物のあるとハ聞いたこともなき故に)頻りに見たくなり、ツト立ちて之を取らんとせしに、主人も座を離れたれば、紳士ハ主人が客人に勞をかけまじとの交際の巧と且ハほこりがに此書物を見せんとて態々立ちたるならむと思へバ、構はず書物に手を掛けしに、こハそもいかに贋の書物にはあらで革裱紙計りなり、かくと見るより主人はあはてふためき之を隠さんとあせる塗炭に、假裝書籍を取落し几上の墨壺を覆したり。主人は「ナニれ構ひ遊ばすナ」といへど墨汁は無遠慮にも机の上より敷き詰めたる花氈の上にながれて、益ひろがる勢に、紳士はなす術を知らず、ハンカチーフをとりいだし手早く墨汁を拭ひ去りたり。　此時恰も食事の用意調ひしを報し來りければ、皆々食堂に赴きぬ。　席已に定まりて食事を始めたり。　紳士は丁度旨きプヂング(西洋料理の名、料理方の部に其製方を說くべし)を肉叉にさしゝとき、令孃は紳士の側にあるピヂョン(仝上)を指し「恐れ入りますがそれをドウかこちらへ」と頼みしかば、紳士は遽てゝプヂングを口に入れしが、何ぞ圖らん其熱きこと沸油の如く熱

さにたえかね、白目黒目をしてありしが、今は羞さも打忘れ皿の中へ吐き出したり。　主人令嬢は此薄倖を氣の毒に思ひ、何か他の物を召し上れと勸め、一人は水がよろしといへば、一人は油氣のものがよからんといひ、遂に火傷の跡には酒に限るべしとて傍の机にありし酒を出ししかば苦しさにたえざりけむ、取る手遅しとグット一盃飲干したり。　一時の疎忽か但しまた故意に出てたる惡戯かは知らざれども、今渡せしは強きブランデーなりければ常よりきつう酒を好まぬ其上に、口元から咽の奥まで爛れたるとなれば、嚙みたる火酒も得嚥下さず手を口にあてると見えしが、酒は五指の間を潜りて杯盤の上に撒きたり。　紳士は今は前後不覺にて逆上げて、面はさながら燃ゆる如く、目より火花の散らぬ計りなれば、前刻ありし事を全く打忘れ、まづ墨汁の濕氣あるハンカチーフを取出し顔を拭ひしかば、滿面忽ち赤黒くなり恰も惡鬼の如くなりたり。　主人令嬢も今は忍びかねて皆々一同に笑出したりければ、紳士も居堪らず、ツト立ちて跡をも見ず立去りぬ。

礼をば忘るべからず。

佐方しづ子

親しき中にも礼義ありとかいふことばゝ、高きいやしきおしなへて、昔より口くせにいふことなるが、まことに理りあるとにこそ。凡て人ハかしこきもおろかなるも、高きもいやしきも、礼義といふことをしらざれば、万の事破れ易し。まして世に立ち人と交るにハ、礼義をおきて何事にかよるべき。されバ卑しき農夫も、夫婦礼をもて相交るときハ、遂に太夫とあり。位高きはらからも、礼を失ひしより、遂に其家国を喪ひぬるためし、古しへよりいとさはなり。かゝれバ男もをみなも礼義によりてこそ世にもたち人とも交るべけれ。ことにをみなハしかぞかし。然るに此頃世の人のとくをきくに、愛といふことをのみときて、この礼といふことを、よそごとにあす人おほし、誠に此愛といふことはめでたきものにて親子夫婦兄弟朋友の中も、みな此心によりておもしろく楽しきものなれは、此情の缺くべからざる、もとよりのことなり。されど愛情といふことは、世の中にありとあるもの何者かこの心あからん。野辺にすむきゞすハ其子をそだてゝみて、おのが身の焼るを厭とせず。兒を携ふる海馬は其敵を防ぐの勢常よりもい

と猛し。されバ愛情といふことハ、いきとしいけるものゝ、おのづから備ふる所にして、親子夫婦兄弟の間はいふまでもなく、朋友の間にも亦この心あるハ、これおのづからの理りといふべし、故に唯愛の情のみにして、禮といふをしらざるときは、禽獣にひとしきのみ。然るにこの頃の世の女ハ、多くハ此禮といふことに、心つかざるかとおもはるゝかどかどなきにあらず。父母に向ひても、ものいひさまむげになめけにて、立居ふるまひ、いとあらあらしく、いづれかめうへの人なるやも知られざる如き人あり、それが爲に親子の間むつまじからずなりゆくとなきにあらず。又朋友の間にても、言葉短かく飾りなきをもて親しみ深きが如く思ひあやまり、ことさら無禮なる言葉もて相かたらひ、いひがたきことをも憚なく打いで聞え、何がしはしかじか、くれがしはかくかくなど、いとでもあるべきことゝ、人のことをもいひ出で、遂にハ友どちの愛情を妨げ、又ハあまりになれなれて、心のつゝしみも打忘れ、なめけなるふるまひ多く、まして言葉などもあまりになれて、無下にいやしきさまにいひかさらひて、更に憚る所なきもの多し。凡て人々の心のことなることは、其顔かたちの如くなれば、親子兄弟といへども、同じ

きこと能はず。親の欲することは其子之をいとひ、兄の望むところは其弟之をよろこばぬなどのことは、免れがたきことなるを、まして朋友の間そ、ちそじの親しみあるにあらず。稀には信義を以てまじはるものありといへども、多くは唯同窓の親しみよりなれるものなれば、いかで其心の違ひなきことを得ん。終には互ひにみじかき所を見出して、忽ち疎ましき心起り、昔日まで心友なりし人も、けふは却りて仇敵の如く、親しみなかりしほど、其友だちのきはめてこまかなるあやまちまでもしりてあれば、そのかみ喰ひさしたる桃をれくりしも我を愛するの至りなりとて之を悦びたるに、今は忽ちなめけなりしとて之を憤り、相互に其隠れたるあやまちをあげかぞへて、人のためにわらひそしられ、大なる身の災となることも其例しなきにあらず。これ皆友だち相互の間に於て禮といふことを少しも知らず、唯一時愛情の盛んなるより、親しみは變じて猥褻となり、終にかゝる有様に至れるなり。夫婦の間に於ては其愛情もとより朋友と同じからずといへども、又かゝるためしいと多し。尤もこれまで位高き人は夫妻の間餘りに禮義むつかしく、愛情却りてうすきやうに見えたれど、今より後はかゝる弊はな

のづから消え行くことゝおもはるゝなり。そは世の中のこと、凡て夫婦もろともになすべきことゝなれば、おのづから親しみの心も深くなるものなればなり。さてかく親愛の情盛んなる間がらとなれば、人の心の常として、なれやすくなるものなり。まして夫より下々のものに於ては、前にのべたる朋友とおなじく、親愛却りて猥褻となり、其詞の中にも行ひの上にも、禮義といふことは跡をはらひて、おのがじゝたちふるまひ、片言片事おのが心にかなはざることあるときは、之を忍ぶ能はず、辭あらあらしくなりて、遂には他人にもさとられそしらるゝやうになりゆくこと、其ためし多し。かゝることは少し物わきまへたる人々にはあるまじきことながら、まのあたり見聞したる人のなきにしもあらず。かく親子朋友夫婦の間にて、はじめは相愛する情の切なりしも、終りを遂ぐること能はず、かゝる境におちいること、誠に悲しく歎かはしき限りにあらずや。其源を尋ぬるときは、皆禮といふことを知らざるによるのみ。人にして禮なきは木草の花なきが如し。何をもて其身を飾ることを得ん。されば親子兄弟朋友夫婦の間、愛に添ふるに禮を以てして相交らば、親疏好悪地を換るのかなしみなく、永く相愛する

ことを得て、まことに樂しきことにあらずや。をなみ此頃いさゝかおもふよしありて、ひとことものしぬ、これもまたあめあるわざかや。

批評

女權沿革史。 文學士辰巳小二郎氏著、哲學書院出版。 女權の沿革を叙するに方り、之を西洋と日本との二門に區ち、殊に日本の部を詳に爲しは主客の勢左もあるべき事なり。之に付きては記者も異存を含む處無けれども、猶爰に一二箇條の疑はしき處を好ましからぬ處無きにあらず。 疑はしき處とは他無し、第二十九丁に太古の男か女を妻とする時、そのために家を新造する由を說きてそれゆゑに「後の世には新婦を新造と呼び、今の世には人の妻を美稱して御新造といひ、處女を年增と區別して新造と云ふに至れり」といひ、第三十一丁に「女も亦善く選拔拒絶を爲を……櫻兒の如きは數人の戀人を皆善しと思へど、其劣り勝りなく誰を一人と定めわびて、終にみづから川に身を投げて死にたり」といひ、また第六十六丁に德川政治の嚴格に過ぎたる由を說きて、さてこそ男の狎れ近付きて危からぬ者、即、遊君、白拍子、女田樂、娼妓、藝妓など、出でたりとあり。 是等は何に因りたるにや、記者の寡聞固陋なる、其出處を知るに困しむなり。 「新造」といふ語は斯くて生ぜしものと云ふは著者發明の說に係るか、もしくは前人の所論に係るかは知られども兎に角に太古の事物に事々しき漢語の「新造」を用ゐしてふは力弱き說に非ずや、殊に况んや婦人の稱に「新造」を用ゐし例は古代の書類に多く見當たらざるに非ずや。 これは或人の說の如く「舟」に本

きたる緣語にして實に後世の創造なりと爲るかた彼是穩當なるへけれさ記者ハひとり思ふなり。遮莫作者ハ學士なり、かばかりの思案だにも無くして淺はかに記すべくもあらず。然らば緣由ハ如何ぞや。次に櫻兒の事の如きも俗傳重に男子とせり。こハ「さくらすが物がたり」に就きて見るも又明亮なる事なるに、之を女子とせられしハ如何なる確證ある故にや。最後に遊君云々とて德川政治の下に於てかゝる玩弄物の出來しよしに書かれたるハ「武將政治の下に於て」と爲すべき心構なりけるを料らず過ちし者なるべければ記者も強ひて之を咎めず。只々作者が此點につき、疏漏なりしを惜むのみ。然く言はゞ人或ハ言はむ、いらつめ記者の評する處は全篇の眼目に非ず、言ハば末端の事項なり、何ぞ斯くまで事々しく指斥するを要すべきぞ。一應理ある說ながら猶いまだ十分なるものに非ず。末端の事項なるにもせよ、著者ハ世人が信を措くべき文學士の地に在る人なるに、或は疑はしき事をさへ確めかへて書做さば一向に信ずる人も有らん。迷を生ずる事もあらん。など末端の事項として輕々しく看做すべけん。

以上は疑はしき箇條に關せる一二の畧評なり。扨是よりは敍事に付き、一言之を評せん。言ふ迄も無く日本の方は西洋の方より精密にして且目新らしき處もあれど、その結末に至りては何と無う解し難き文勢なり。武將政治の下に於ては婦人の權力舒びざりし由を丁寧に論ぜし末に、さて維新以後に至りては「男子は知の分身にして婦人は美の分身となるべし」など預言者めきたる說を載せて而も之が證據をば十分に與ふること無し。げにも文勢の不思議に針を包める如き諷諭の意味を寓せしものとハ大方の人が見るものから、何と無く滑稽めきて終に眞面目なる体も無く、殊に敍事のあまりに少なきはなか

〱の遺憾にて隔靴の嗟嘆無きにあらず。西洋の方も亦然なり、些しく古代に密にして却つて近代に疎してふ評さへも有るならずや。

終に臨みて注意までに述べんと欲するものは全篇の假名遣の文學士の筆に成れるにも似氣なく、誤謬多きことさにふん。今さら見れば假名づかひなどさして要なきものに似たれど、さて之が規律なり、束縛なり定實に廢をべしといふ定論の無き内は免まれ角まれ、古例に因りて、其儘の假名遣を用ゐ、決して自我一流なる用方など爲をまじき事にして、這は著者とても無論また贊成なることとなるべし。然るに全篇に斯くの如く、數多き誤謬を出だしゝは思ふに活字の誤植にして、をふはち校正者の罪なるべけれど、それに連なる作者なれむあながち又其責任をば免得へきものにあらじ。這は辰巳氏一人につきゝる評にもあらず、假名遣ハ愚なり〱酷き文法上の誤謬さへをも堂々たる文○○○學士の作にも見ることとあれば、かた〱之を打出だしつ。妄評多罪。示諭是祈

月報

○日本音樂會。 去月十九日午後八時半より上野華族會館に於て催されたる仝會は來會せられたる紳士貴女二百名に餘り、陸軍々樂隊、近衛軍樂隊、及び音樂學校諸氏の順次十二回の奏樂ありて何れも面白かりし。中にも(バイオリン)甲田廷子、(箏)森富子、(洋琴)遠山甲子子三令孃の合奏せる日本ポルカの曲ハ滿場の喝

采を博したり。また全會は隔月一回催さるゝ由にて、最良の音樂を擴張普及し、本邦公衆音樂上の趣味を高尚ならしむる目的なりと云ふ。

○私立共立女子職業學校。昨明治十九年九月神田錦町に創設し、本年二月神田一ツ橋通りへ移轉したる全校は益盛大の域に進み、現今生徒の人員は甲科乙科を合せて二百十七名にて寄宿舍の設けも有りて啻に海內の需用品を作るに止まらず廣く海外へ輸出すべき物品をも製作する由にて、生徒に節儉貯畜の良習を養成せんとて貯金をも實施せらるゝとの事なり。

○私立東京女學。同學は創業日尚淺きも逐日隆盛の域に赴き從來の校舍にては狹隘なるを以て增築するの計畫ある由にて去月十七日同學生徒及び其父兄を集めて講談會を開き、イビー夫人の婦人教育論、醫學士竹中成憲氏の婦人衞生及び第一高等中學校教師ツルッ氏の講談等もありて頗る盛會なりし由なり。

○淑女以文會。原田良子其他十一婦人方の發起に係る全會は、專和漢洋の理學文學の講談を聞き、傍親睦を厚うせんとの目的にて每土曜日午後二時より神田尚絅學校に於て開會し、去月二十九日其第一會を開きしが、來會せられし淑女

百餘名にして宇川盛三郎君其他諸氏の演説祝詞音樂合奏等もありて頗る盛會ありし。

○京都婦人共勵會。九月廿四日を以て其第一會を開きし全會ハ來會者百餘名に及び浮田和民氏設立の趣意を述べ、バッソリ夫人の社會の害毒、金森通倫氏の家政論の演説其他唱歌等を催し中々の盛會なりしとの事にて本月廿六日其第二會を京都倶樂部に開くと云ふ。

○京都婦人慈善會。北垣知事夫人其他有志者の熱心にて益盛大に赴き、去月一日倶樂部に於て定期會を開き高等女學校生徒の唱歌、理學士横地石太郎氏の演説等もありて貧民學校設立の協議を爲したりと。

○京都金蘭會。九月廿四日高等女學校に開き、師範學校教員を聘し教育及び理化學の講談ありしと云ふ。

○長崎尋常師範學校。全校の女生徒ハ此程悉皆洋服を着用する事になれり。

○長野縣師範學校。長野縣にてハ此度師範學校を新築し、來る廿五日に開校式を行ふ由、其節森文部大臣も臨場せらるヽといふ。又來二十一年四月にハ

女子部をも建築し、女生徒を募集すべき筈なりと。

○學藝之世界。　下谷金杉村實育社より發兌せし教育雜誌ハ題號を學藝之世界と改題し、定價を半減し、益記事を精選せらるゝ由なり。

○明治女子職業新誌。　今川小路の明治女子職業協會より發兌せる同雜誌ハ女子職業に關せる學科技藝を記載せる好雜誌なり。

○束髮の統計。　横濱港の束髮用諸道具品を外國より直輸入せる商店にては本年二月頃より其賣高十分一に減せし由、尤も現今にては婦人手づから作る物もあるべく、又市中にて夫々製造する處もあるべけれど、兎まれ十分一の減額とはと社員へ語りしを聞きて又候復古の時代に變遷するかと暇好きの社員はご苦勞にも去月湯島天神の祭禮に、女坂の中途にて通行婦人の髮形を調査せしに、婦人百人の内にて二十歲以上三十歲以下と見受けられたる婦人方にて束髮六人丸髷三十七人、二十歲以下十三歲以上束髮二十八人、十三歲以下七歲以上束髮二十六人の實地調査を爲せり此統計に依れば年の若き婦人程束髮多くして束髮は學齡の婦人に限るとも云ふ可く一頃流行熱の激しき時よりは少しく束髮の

勢力衰へしにはあらずや。勿論「此統計のみにては知る由なく、殊に祭禮杯へ出掛ける婦人のことなれば……」との說もあり。實際の勢力は如何なるものにや。

寄書

いらつめ記者御許へ。　伊豫。まつぎてい。

拙き水くきの跡をもおもはで一筆示し上まゐらせ候。やゝ肌寒き此頃の空にははべれども、御社皆々樣御かはらせもれはしまさず、山山嬉しくこそはべれ。更け行く夜半の月に向ひ、獨りこし方行末を思ひやり侍れば、さても女子は世にもつとめの重きものかな、幼くて兩親に孝をつくすはもとより年たけて人の妻となりてはをふとの杖ともしらとなりよく其家を調ふることなかなかかろき業には侍らず。母となりては白くなさんも黒くなさんも教のままなる小兒をもりて御國につくす丈夫をまた壯士をたすくる淑女と育てなすこと、こもまさいとくかたき業とこそ思ひはべれ。かかる重き務をしもなど教育のなくてな〳〵得はべらん。御社こたび「いらつめ」てふ雜誌を出ださせ給ひしもおはかたは女

子をしてこの務をよくなし得せしめんがためにこそそれはすべけれ。妾のいともよろこび侍るハ此雑誌がいたづらにうはべの開化を導くにあらで、智徳をすゝむるを先にすといふことにこそはべれ。外國の風俗に醉ひてなにごとにもあれひとそらに習ふをすゝむるにはあらで、彼の優れるを取り、我の劣れるを補ふといふことにこそはべれ。あはれこの主意を失はですます〳〵妾等のやみぢをてらす燈火とならせ給はんことをねぎまつるのみにはべり。慈み深き神の御手もて作られし人にいかでか生れながらに尊きと卑きとの分やは侍る。さるに今の世は男は尊まれ、女は卑まるゝはあまりなることどもにこそ。世のはすはなる婦人輩は筆のいのち毛もたゆんばかりに男女同権を説くもののふ。妾はそれを説くひまにはわらは等女子の智徳を進むる道につくされんことを願ふになん。そのゆゑを如何といふに同じき男子なれども徳もなく智もなきものは人にめし使はれて卑まるゝには侍らずや。さるに今迄の如きあさはかなる智徳もて猥に男尊女卑を憤り男女同権などをかれこれいふは僕奴婢等が主尊奴卑を怒り、主奴同権を説くとおなじ事にして、迚も言ひがひなきことになん。

されば今の男尊女卑は男子が女子を卑むるにはありながら女もまた自ら我身を卑むるものにははべらずや。此をおもひ、彼をおもへばかへすぐ\も女子の教育は今日に欠くべからざるものにして、さればこそまた御社いらつめの如きものも欠くべからざるものに侍れ。あはれひろく筑紫陸奥のはてまでもひろめさせたまひてよ。　妾曾て賢父ハ賢兒ヲ持タザルモノアレドモ賢母ハ必賢人ヲ生ムてふことを聞きて侍り。されば後にわが瑞穂の國を榮えしむるも衰へしむるも妾等の教育に因ることにて妾も志を同くする世の親しきうさぐ\もろとも日本文明の母とならんことを及ばずながら念じてはべり。拙き筆に思ふことをえつくしがたけれどもたゞ\女子教育の必要を感せし折から御社いらつめの發行をみたてまつりしまゝ嬉しさのあまりうくも思ふことども聊かいつゝり御目を汚しまいらせ。　あなかしこ。

餘興

一休蜷川の會談に聞えたる論法は淺はかなれども是を以て邪論を破るの便

ありとぞ。 此に出せる問答は聊かながら淑女の鬱を拂はんよすがとなるべし。

鳥にもあらぬに地を堀るものをツル(鶴)とは如何。

動物にもあらぬに水を盛るものを瓶(龜)と云ふが如し。

貴くもなきものを紙(神)とは如何。

眞中にもあるものを隅(墨)と云ふが如し。

あやまるとき御免(五面)と云ふは如何。

返答するとき十面をつくると云ふが如し。

左の問に右の如き居理屈を附け給へ。

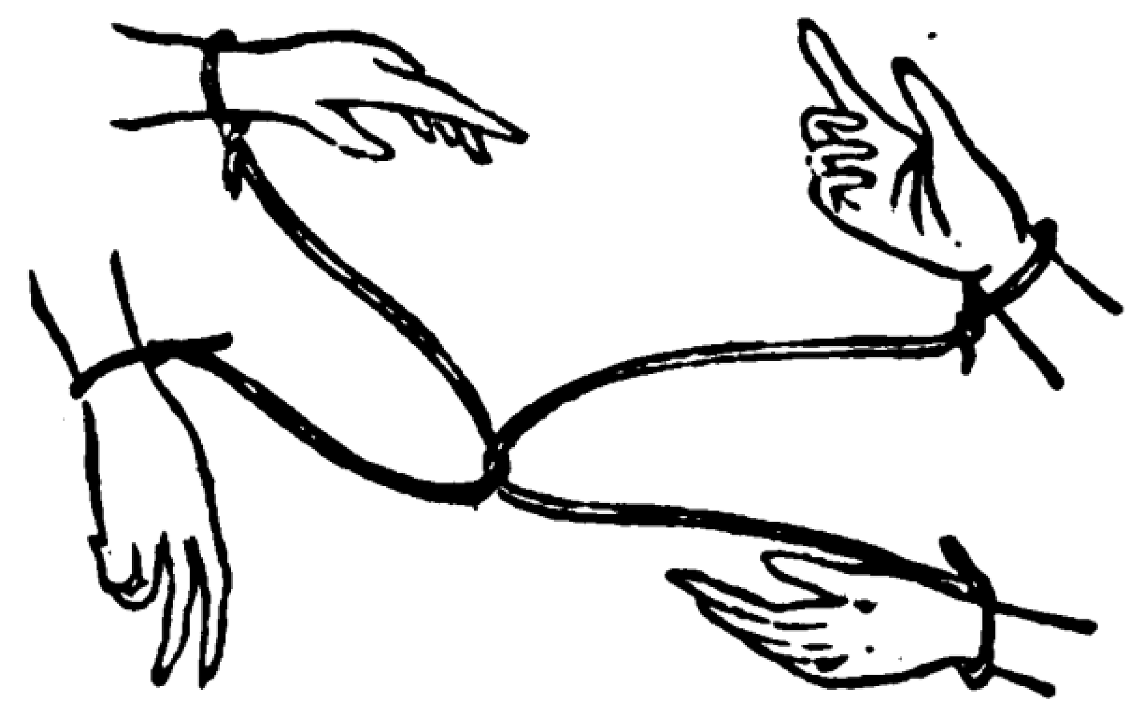
喜びの文章をも書くものをインキ(陰氣)とは如何。

植物にもあらぬに堅き娘を生娘(木むすめ)とは如何。

虫にもあらぬものを雲(蜘蛛)とは如何。

手錠解方の口傳

上の圖の如く二人相對して紐にて手錠を箝められたり。 何がなして之を解か



んものと思案の末一人は遂に其方を發見したり。自分の繋がれたる紐の中程を絞りて其端を乙の右又は左手の結目の下を通して乙の掌の方に引拔き借て絞りたる紐を開きて乙の手甲を潜らしめ互ひに引き合ひければ容易に解け去りたり。

前號人の名を言宛てる法の甲表中二三の誤脱がありましたから今改めて甲表のみ再び掲げます

甲表

いはほとりるわよれつあむゐれやけこてさゆみゑもす
ろはへとぬるかよろつらむのれまけえてきゆしゑせす
にはへとをわかよねあらむくやまけあさきゆひもせす
ちりぬるをわかようゐのれくやまけめみしゑひもせす
たれろつねあらむうゐのれくやまけん
ふこえてあさきゆめみしゑひもせすん

遞信省認可

持主兼印刷人 新保磐次
編輯人 正木政吉
發行所 東京本鄕區湯島天神町壹丁目五十九番地 成美社